度の実習においても同様の分布が確認できた場合，教科書の記載において，舌神経の感覚の支配領域を「下顎舌側歯肉全体」と改める必要があると考える．

2. 上顎洞炎との鑑別が困難であった歯根嚢胞に歯根の迷入がみられた一例

A case of tooth root immigration into the radicular cyst that was difficult to differentiate from maxillary sinusitis

○菅野 江美，泉澤　充，小川　淳 *，
高橋 徳明，坂本 りく，金森 尚城，
古城 慎太郎 *，池田 裕之介 *，
武田 泰典 **，山田 浩之 *，田中 良一

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野，岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野*，岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野 **

目的：歯根嚢胞は最も発生頻度が高い歯原性嚢胞で，上顎に生じたものは，上顎洞内に進展する場合がある．今回，われわれは上顎洞を占拠する歯根嚢胞内に歯根が迷入した症例を経験したことを踏まえ，日常臨床で遭遇しうる上顎洞疾患の画像所見による鑑別法について考察を加え報告した．
材料・方法：症例は47歳の女性．紹介元医院で上顎右側第一大臼歯の根管治療を受けていたが経過不良で抜歯適応と判断された．同時期に近在耳鼻科において上顎洞炎の診断で治療を受けていた．抜歯操作中に口蓋根が上顎洞内に迷入したため，口腔外科を紹介受診した．
結果：パノマラエックス線画像では上顎洞底に歯根様不透過像を認め，歯科用コーンビームCT（CBCT）では上顎洞内に進展した嚢胞様病変内への歯根の迷入が確認された．全身麻酔下に嚢胞摘出術を施行，摘出標本の病理組織学的診断は，歯根嚢胞と嚢胞腔内への歯の迷入であった．
考察：上顎洞疾患の中にはパノラマエックス線画像やWaters法で診断できる症例も存在するが，上顎洞内を占拠する病変や骨形態の異常，石灰化を伴う病変では，CBCTによる診断が必要と思われた．
結論：本症例は，パノラマエックス線画像上で左側上顎洞内の病変が歯性上顎洞炎と診断され，根管治療が行われていた．CBCTで歯根嚢胞の診断となったが，日常臨床において上顎洞を占拠する大きな病変で，骨吸収や形態変化などがない症例では，パノラマエックス線画像での診断に苦慮することが多いと思われた．

3. 上顎両側第一小臼歯頬面に認められた過剰結節の一例

A case of supernumerary tubercle observed on the buccal surface of bilateral maxillary first premolars

○石川 雄大，中野 廣一 *，小川　淳，
古城 慎太郎，山田 浩之，藤原 尚樹 **，
浅野 明子 ***，工藤 義之 ***，
三浦 廣行 ***，藤村　朗 ***

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野，なかの矯正歯科 *，岩手医科大学解剖学講座機能形態学分野 **，岩手医科大学歯学部口腔医学講座歯科医学教育学分野 ***

【症例の概要】症例は8歳の男児．永久歯に多数の先天性欠如があることをかかりつけ歯科医に指摘され，矯正歯科治療を希望して来院した．通常の矯正歯科的診査の際に，上顎両側第一小臼歯頬面に過剰結節を認めた．本発表では歯科用コンビームCTによる検査所見も含めて，上顎両側小臼歯について詳細を報告した．

口腔内所見では，永久歯，乳歯の先天欠如と一部乳歯の晩期残存がみられ，上顎両側第一小臼歯頬面には2本の結節状隆起と，隆起間に陥凹が認められた．上顎両側第一小臼歯の歯科用コンビームCTでは，髄室角が頬側に1つ，頬面結節にはそれを認めなかった．根管は1本で，歯根表面には溝等も認められず，癒合歯の可能性はないと判断した．
【考察】小臼歯の過剰結節は非常にまれであり，上顎臼歯部異常結節についての記載も，ごく少数の成書と論文にしか認められなかった．上顎